
君が愛おしくて仕方がない...愛してる

朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が愛おしくて仕方ない…愛してる

【Nコード】

N1238T

【作者名】

朱雀

【あらすじ】

愛してる…チアキ

愛してる…キョーコ

ヤクソク

カタカタカタ

パソコンの

キー音が鳴り響く

暗い部屋

そこには

男装した女子中学生が
パソコンを弄っていた

どうも（ハ・ハ）ノ

キョーコ、ロゲイ？ン

（、・ω・）キリッ

なんて。

誰がいる？

書き込みをする少女

名前は 京子 キョーコ

と読む

キョーコ

私がいるよ^^

もう　またふざけちゃって

京子に続いて

書き込んだのは

女子高生の

千晶　チアキ　だった

千晶と京子は

インターネットでは

姉妹のように仲良かった

だが

二人の住んでいる

地域は遠く

会ったことがない

写真などで

お互いに顔はわかる

二人とも会ってみたいと

ずっと思っていた

そして…

二人は

恋人の如く愛し合っていた

チアキ

俺

お前のこと

愛してるよ
...

キョーコ...

私も？

愛してるからね
...

キョーコは
チアキの純粋さに
...

チアキは
キョーコの強さに
...

二人は

惹かれあっていた…

そして…

ヤクソクをする…

チアキ…

必ず会いに行く

それまで

待っててくれ…

キョーコ…

うん

何年たっても待ってる

貴女が好きだから

二人が会うのは

二人は

だが…

何十年後だろうか

何年後

他人には切れない

確かな

愛

があつた…

愛してると伝えたい…

空港――

「ここ…か…」

キョーコは空港にいた

愛しい人に会うため…

チアキに会うため…

（待つてろよ…すぐ
会いに行くから…チアキ）

なんども

チアキの名前を

連呼するキョーコ

それだけ

愛しい人なのだろう

待ち合わせは

空港に近い

小さな公園…

チアキの目印は

白のレースのワンピースを
着ている長髪の人

だという

キョーコは反対の

黒のジャケットに
黒ジーンズ

だそうだ

「ここが公園か？」

キヨーコは

敷地内に入る

ベンチには

チアキの特徴をした

女が 座っていた

そつと近づくキヨーコ

相手も気づき

顔を上げる

「っ!!」

「!？」

お互いに目が合い

顔を確認する

二人とも

見覚えのある顔だった…

「チ…アキ？」

「キョーコ…なの」

名前を呼び合い

さらに確認する

そして

確信した

「千晶っ!!」

「京子お!」

二人は抱き合う

強く

強く

離さないように

「千晶…会えて嬉しい…」

「私も嬉しい…」

キヨーコ…愛してる…」

「俺も愛してる」

二人は

他から見れば

まるで…

抱き合っている

カップルだった

そして…

静かに

二人は

愛の言葉を呟き

そっと

キスをした…

デートしようか…

あれから

キョーコは

チアキと一緒に

暮らしていた

まるで

新婚夫婦のようだ

「なあ、チアキ」

「ん？何？？」

キヨコは

少し頬を赤く染めて

「デート…しないか？」

と チアキを誘った

チアキは嬉しさの

あまりに涙を流した

「なっ？！泣くなよ！
嫌だったか？？」

抱き寄せて
心配するキョーコ

チアキは
目にいっぱい涙を溜めて
笑いながら

「嬉し泣きだよ
デート…行きたい！」

と 言つて

キョーコに抱き着く

キョーコは
安堵のため息をして

フツと 微笑み

チアキの頭を撫でる

そして

どちらともなく

そっと キスをし合う

キョーコは桃色に

チアキは林檎色に

頬を染めて

見つめ合い

笑いあつた

愛の言葉をジंकスと共に…

日曜日――

キョーコとチアキは

手を繋ぎ 遊園地へ

足を運んでいた

（買い物かと思っただが
違っただな…）

キョーコの頭の中には

女のデートコースは

買い物

←

←

カフェ

←

←

デートスポット

というものにな
っていたため

少し驚いていた

「キョーコ？ボーツとしてどうしたの？
私といてつまらない？」

チアキは
眉を伏せて言った

「んなことないよ
チアキといてつまらん
わけねーよ
むしろ舞い上がるくらい
嬉しいさ」

と 無邪気に笑い

チアキに言う

恥ずかくなっただのか

顔を赤くし俯くチアキ

「ころころ

可愛い顔が見えん
顔あげて」

キョーコが

半強引に顎をクイツと

あげて顔を見る

チアキは

真っ赤な林檎のような

可愛い顔をしていた

「恥ずかしいコト
言わないでよ」

「ははっ

弄めて悪かったよ」

そして

また歩きだす二人

遊園地に着き

アトラクションに乗る

「大丈夫か？チアキ
休むか？」

「うん…」

絶叫のアトラクションに

連続で乗り回し

チアキが少し

体調を崩して

しまったようだ

キョーコは

チアキの背中を摩りながら

心配な面持ちで

チアキを見つめている

（ふふ

あんな心配してくれて
嬉しいな…優しい）

とチアキは思っていた

しばらくして

チアキの

体調が良くなつので

優しめのアトラクションに

乗ることにした

それから

昼を食べ

パレードなどを見て

ホントに二人にとって

シアワセな時間だった

夜 11時50分

二人はイルミネーションが

綺麗な観覧車に乗った

「今日は楽しかったよ

誘ってくれてありがとう
キョーコ」

ニコと笑い

お礼を言うチアキ

「俺も楽しかったさ
また来ような、チアキ」

それから…

とキョーコが付け足す

「ん？何？」

「俺達…

正式に付き合っ
てなかったよな？

だから…

チアキのことが
大好きです／／／／

愛しています／／／

付き合ってください」

ペコリと

頭を下げて言うキョーコ

顔がいつもより赤い

チアキは

驚きと嬉しさのあまり

また 泣き出して

しまったが…

今回は

返事をしながら

涙を流した

「わ…たしっ…もっ

だいっ…す…き…です！
…っ…

あ…いし…てまっ…すっ

っ…っ…

だっ…から…

きやつ」

チアキは

話している途中だが

キョーコは堪えられず

強く

抱きしめた

「

伝わったよ

チアキの思い…

ありがとう

愛してる…」

「うん

私もありがとう

思い伝えてくれて

愛してる…」

観覧車が頂上に

上がった時

二人は

キスをした

それを 祝うように

花火が上がった

「わぁ」

「キレイだな」

二人は

観覧車を下りて

手を繋ぎ

帰っていった

観覧車のジンクス

頂上に来たとき

二人でキスをし

12時ジャストに上がる

花火を見れたカップルは

別れないと言う

生まれてきてくれて……ありがとう

午後 3時

二人は

菓子をつまみながら

テレビを見ていた

二人の好きな

テ■スの 子様 だ

「……………」

「……キョーコ」

キョーコの目線は

テレビの下辺りにあった

何か考え事をしていた

「……キョーコ？」

「……………」

「……キョーコってば」

「ん？何チアキ」

チアキの呼び掛けに

反応出来なかったキョーコ

それだけ深く

考え事をしていた

「どうしたの？

最近変だよ？？」

悩み事なら言ってね？」

眉を伏せて言うチアキに

ニコツと微笑み

頭を撫でてやる

「悩み事じゃないよ
大丈夫さ、もう少しで
チアキにも教えるよ」

と 肝心なトコを

隠して伝えるキョーコ

「うん…」

納得いかなかったが

とりあえず頷くチアキ

10日後

キョーコの様子は

変わらなかった…

（どうしたんだろ…
キョーコ…）

今日は休みで

キョーコは

朝早く出掛けていた

家にはチアキ一人

チアキは

ベッドの上で

ひそかに泣いていた

「ただいまー

.....

チアキ？」

キョーコが帰ってきた

いつもならチアキが

おかえりさないと

駆け寄ってくる

が

今日はそれがない

「チアキ、寝てるのか？」

キョーコが帰った時刻は

夜 7時

いつもなら夕食を

食べている時間だ

静かに 寝室を

覗くキョーコ

「スウ……スウ……」

「寝てたか……」

チアキの隣に

寄り添い頭を撫でる

「?……」

チアキ……

泣いてたのか?」

チアキの周りのシーツは

湿っていた

チアキは涙を流した後

そのまま寝てしまったのだ

優しく頭を撫で

添い寝をする

「不安にさせて

ゴメンな…

明日…ちゃんと話すから…

愛してるよ…

おやすみ…」

チアキの額に

キスを落とし

キョーコも眠りについた

翌朝――

「ん…

えっ？キョーコ？？」

「スー、スー」

チアキは

隣にキョーコが寝てい為

少し驚いた

「…いつ…
帰ってきたんだろ…？」

疑問を抱きつつも

朝食を作るため

台所へ向かう

トントントン

軽快なリズムの音で

目を覚ますキョーコ

「…チアキがいねえ…」

まだ寝ぼけているのか

フラフラと立ち上がり

音のする台所へ

足を進める

その頃チアキは

朝食が出来上がる頃だった

「よし

あとは味噌汁だけね」

キョーコが好きな

味噌汁を作るチアキ

その時 キョーコが

チアキに抱き着いた

「きゃあっ?!」

「ん…チアキ

おはよー……」

抱き着きながら

チアキの耳元で

呟くキョーコ

「／／／／（恥ずかしい!）」

そのキョーコの

行動に顔を赤くするチアキ

「チアキ、顔赤えー

ハズイのか？」

チアキを弄めるキョーコ

「／／／もうっ意地悪！」
「ははっ」

朝食を食べて

二人で寛いでいた

「なあチアキ」

「なあに？」

キョーコがチアキを呼ぶ

そして チアキの頬に

キスを落として

ペアピアスをチアキに

渡すキョーコ

「誕生日…おめでとう

生まれてきてくれて
ありがとう、

愛してる」

「キョーコ…」

抱きしめ合う二人

キョーコが最近

様子がおかしかったのは

チアキへの

誕生日プレゼントに

悩まされていたからだ

二人は

これから

ずっと愛し合つてあろう

貴女に甘い甘いB a r e n t a i nを…

2月13日――

（バレンタイン
どうしょ～）

明日はバレンタイン

チアキはキョーコに

渡すことを考えていたが

キョーコがいるのでは

作るにも作れない

（どうしょ～）（焦）

「…なあチアキ」

「なっ何?!」

焦りのあまり

声が裏返るチアキ

（そーとー

焦ってるな（汗）

キヨーコは気を遣い

本を買いに行くと

言って家を出た

「その間に

作らなきゃ（焦」

チアキは急いで作った

もののキヨーコに

喜んで貰える事を

願って作った

完成し作ったものは

トリュフと生チョコと

アーモンドが入った
チョコだった

キョーコが好きな

ビターだ

可愛くラッピングして

冷蔵庫の奥に隠す

「よしっこれでいいかな」

この時ちょうど

キョーコが帰ってきた

「キョーコおかえりい」

チアキがキョーコに

抱き着く

「ただいまよ」

（作れたか…）（ホッ）

内心安堵して

微笑むキョーコ

「チアキ、テニリ
最新刊あつたぜ」

「ホント？

見たいみたい！」

チアキはキョーコに

寄り添い一緒に

本を読む

この時チョコの

甘い香より

二人の甘い雰囲気

が漂っていた

翌日 Barentain

「キョー」

「ん？何チアキ」

チアキがキョーコを

呼び例のチョコを渡す

待ってましたと

言うようにキョーコは

微笑み それを受け取る

「食べていい？」

「うん！」

トリュフを一個

パクツと食べる

ニコリと微笑んで

「美味しい」

と言うキョーコ

「ホント？よかったあ」

フワッと微笑んで

喜ぶチアキ

「ありがとな、チアキ」

ぎゅっと抱き寄せて

キスをするキョーコ

「／／／／／」

いきなりで

驚いたチアキは

顔を真っ赤にした

「ふっ

ホワイトデー…
楽しみにな」

意地悪く笑い

ぎゅと抱く力を

強くする

「うん／＼」

チアキも強く抱きしめ

また キスをした

バレンタイン キスは

甘い甘い チョコ味

お返しのホワイトデーは…

ホワイトデー前日

『ありがとうございます
またお越しく下さい』

「…よし……」

軽くニヤけるキョーコ

さっき購入したのは

ペアブレスレット

キョーコは

ピアス、ブレスレット
ネックレス、リング

の4つのペアアクセを

チアキに渡す予定だ

ピアスは
誕生日に

ブレスレットは
ホワイトデーに

ネックレスは
クリスマスに

そしてリングは
記念日に

チアキを好きになってから

ずっと考えていた

デザインにもこだわり

特注で造って貰っていた

ピアスは

羽根をモチーフに

ブレスレットは

流れ星をモチーフに

ネックレスは

クロスモチーフに

リングは

ハートをモチーフに

嵌め込む宝石もこだわり

ピアスは

カルサイトに

ブレスレットは

ターコイズに

ネックレスは

エメラルドに

リングは

ダイヤモンドに

また それらの宝石は

パワーストーンで

意味もちゃんと

こだわっている

カルサイトは

精神的な活動を活性化させ二人の絆を強め
愛し愛される無条件の
喜びを与えてくれる

と言われている

ターコイズは

災いや危険から
身を守る石として
有名なもの

エメラルドは

愛と繁栄を象徴し
あらゆる幸福をもたらす
絶対的な愛の石として
大切にされてきた

ダイヤモンドは

人を完成へと近づけて
くれるといわれる
また 美しい輝きは
永遠の愛の象徴と
されている

すべてこだわり

渡すその日までに

出来上がるよう

予約してある

「ただいま、チアキ」

「おかえりさない！
キョーコ」

ぎゅ と抱き合い

挨拶を交わす

「今日は何の日？」

「待ちに待った
ホワイトデー！」

キョーコの問いに

ニコリと微笑み

答えるチアキ

「ふふ

はい、お返し」

キョーコも微笑み

プレゼントを渡す

「うん、ありがとー」

二人はソファに座る

チアキはキレイに

ラッピングされたものを

剥がし取り出す

「わぁ」キラキラと輝く

宝石の流れ星

淡く光るターコイズは

神秘的だった

それを腕に通すチアキ

「ありがとうキョーコ!」

「どう致しまして」

微笑み合う二人

これからも

宝石に護られ

幸せに暮らすであろっ

無理はしないよ…君の泣き顔は見たくない

—ゴールデンウィーク—

「はい、ええ

…わかりました」

キョーコは仕事電話中

最近仕事が

忙しくなったキョーコ

ゴールデンウィークも

休みがでるかどうか

（キョーコ…）

ゴールデンウィーク

遊び行けないよね……………）

「…はい、失礼します。
…フウ」

キョーコの目元には

クマのようなものがある

徹夜でパソコンに

向かい仕事を続けている

お疲れのようだ

ドカリと

ソファに座るキョーコ

疲れを見せるのは

キョーコにとって

珍しいことだ

「…キョーコ…大丈夫？」

「ああ…大丈夫だよ」

眉を伏せて

心配するチアキ

ニツコリ笑うキョーコ

（ちっ…

ゴールデンウィーク…

…どうするか…

このままじゃ…

チアキと

デートできねえ…！）

表情は笑っているが

内心焦っている様子

（…しかも…

…欲求不満か…くそっ）

少々苛立ちもある

（さっさと終わらせるか）

（キョーコ…）

無理して笑ってる…

ホントに大丈夫かな…？

チアキは悪い予感が

していた

その予感が当たるとも

知らずに…

ゲッソリしているキョーコ

ゴールデンウィーク中

全く寝てないのだ

(明日は最終日じゃねえか
早く終わらせねえと……………っ
……………)

トサリと

力無くキョーコは

床に倒れた

音がして

キョーコの部屋を

覗いてみるチアキ

「!!!?キョーコ!!!」

顔は真っ青で

血の気が引き

脂汗を浮かべて

苦しそうに倒れていた

すぐに救急車を呼び

病院に搬送される

「睡眠不足に疲労が溜まっていたのでしょう
これからは
気をつけるように
言ってください」

「はい……」

医師に言われたチアキ

チアキはキョーコが

倒れたショックで

精神が不安定な状態だった

「キョーコ……」

まだ顔色がよくない

キョーコの頭を撫でる

「ん……チアキ……」

キョーコが目を覚ました

「キョーコ……！」

ぎゅうと抱き着くチアキ

「心配かけてごめん」

涙を流し 震えてる

チアキをそつと抱き返し

頭を撫でてやるキョーコ

「無理しないでよお……！」

わんわん泣き出すチアキ

それをあやすように

話しかける

「ホントにごめんな
ゴールデンウィークは
終わっちまうけど

土日は精一杯甘やかすから無理して
独りにして
心配させて

「ゴメン」

あれから

キョーコは無理をせず

仕事をこなしている

土日は目一杯遊び

キョーコの

欲求不満も満たされたとか

クリスマス…思いの詰まったP r e s e n t…

クリスマスイブー朝ー

「ふあゝ…あ。おはよー

チア「キョーコ！

メリークリスマス！！」

あ…ああ。

メリークリスマス…」

いきなりの挨拶に

驚くキョーコ

（あー…ネツクレス
取りに行かなきゃな…）

「チアキ…」

「ん？」

不意にチアキを呼び

朝のキスをするキョーコ

「っ！？／／／／」

「ふっ、さっき俺の
言葉遮った罰と挨拶」

ニヤリと意地悪く

笑うキョーコ

顔を真っ赤に

しているチアキ

満足したのか

着替えだすキョーコ

「どこか行くの？」

「おう、昼には帰ってくる昼飯作って待っていてくれな？」

ニコリと笑い返事を

するチアキ

「行つてきマース」

「ふふっいつてらー」

微笑み合つて

出掛けるキョーコ

「お昼は普通で
夜は豪華にしようかな？」

そう考えているとき

チアキのケータイが鳴る

「もしもし？」

《チアキ。あ、俺。》

キョーコからだった

「どうしたの？」

《夕飯のことは
考えるなよ
外行くからな》

「あ、うん。わかった」

《おう、じゃあな》

「うん、バイバイ」

電話が切れる

外とは外食のことだ

「楽しみだな」

「ただいまー」

「おかえり！」

12時ジャストに

帰ってきたキョーコ

「お！旨そう」

「ふふっ食べて食べて」

パクリと一口

「うめえ！」

「ホント？よかったー」

それから

他愛のない話を

しながら昼食をとる

そして プチデートの

ようなものをして

夜まで過ごした

高級レストラン

| Silver Out |

「じゃ入るか」

「ちよっ…キョーコ」

なんの抵抗もなく

入ろうとするキョーコ

ここSilver Outは

世界のセレブが

来客するレストランだ

「大丈夫、行こ？」

「う…うん」

不安を抱きながら

渋々入るキョーコ

「お待ちして下りました
京子様、こちらへどうぞ」

「ああ、頼む」

「え？…え？」

店員との会話に

疑問を抱くチアキ

「「こそさ…俺の店……」

「ええ！？」

キョーコの職業は

声優のはずだ

こんな高級なレストランを

持っている

聞いたことがない

「黙っててすまん

と言っか、元親の店だから受け継いだみたいな」

「納得」

中へ通され

1番いい部屋に

案内された

「じゃあ

いつものフルコース」

「畏まりました」

黒のベースの

大人な雰囲気な部屋

座席が二つと

言うことは

カップル専用の部屋

とわかった

数々の料理が

運ばれ

いつものように

会話をしながら

ディナーを楽しむ

「チアキ…はい

Merry X·mas」

「キョーコ／／／

メリークリスマス」

キョーコはチアキに

プレゼントを渡す

エメラルドの

ネックレスが輝く

「愛してる…チアキ」

「愛してる…キョーコ」

お互いキスをして

ロマンチックな夜を

過ごした

夜は宴 (party)

最高のプレゼントは愛の言葉

― 記念日 ―

時刻 夜8時

大人っぽい雰囲気

高級レストラン

ワインの香りが

鼻をくすぐる

美味しそうな

匂いが香る料理

「チアキ…愛してるよ」

「うん…私も愛してる」

カアンツと

ワイングラスを

響かせ口に流す

料理が運ばれ

口にする

驚くほど美味で

嬉しさが込み上げる

「チアキ…はい」

「え？…／／／」

差し出されたモノは

ネイビーの小さな箱に

輝くダイヤモンドの指輪

「結婚…しようか…／／」

「はい…！／／」

二人とも顔は

真っ赤で俯き気味だ

、

帰り道――

『／／／／／／／』

二人とも

顔を真っ赤にして

夜の公園にいる

風と草木が揺れる音

だけが響く

キョーコはチアキの

肩を抱いている

「チアキ……」

キョーコがチアキを呼び

そつと

キスをする

背景は満月

重なりあう影

キラキラと輝く星

それよりも

ずっと綺麗な

金剛石の指輪

淡い光に包まれ

静かに愛し合う二人

永遠に…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1238t/>

君が愛おしくて仕方がない...愛してる

2011年10月8日19時58分発行